

ぼんぼん時計

JSPS Bonn Office

独立行政法人 日本学術振興会 ボン研究連絡センター
四半期活動報告
(2008 年 7 月～9 月)

< 目 次 >

はじめに

1. ドイツ連邦レベル等での学術動向

- 1-1 エクセレンス・イニシアティヴを 2011 年以降も継続する意向
- 1-2 大学教育が研究の対象に
- 1-3 大学等研究機関における数学ランキング発表
- 1-4 大学卒業者過去最高を記録
- 1-5 79 大学の女性教授計画構想を採択

2. ボン研究連絡センターの活動

- 2-1 JSPSAbend 開催
- 2-2 来訪&訪問、会議出席等
- 2-3 その他の活動

3. 今後の予定

4. その他お知らせ

- 4-1 早稲田大学生インターンシップ終了報告
- 4-2 現地職員の交代について

センター長雑感

はじめに

小山副センター長の後任として7月からボンセンターにて勤務することとなりました宮元博央と申します。2002年4月～2003年3月まで研修員（現国際協力員）として当センターに勤務しておりましたので活動内容はある程度把握しているつもりでしたが、この6年の間に拡大したセンターの業務量には驚かされる毎日です。歴代センター関係者のご尽力による日独学术交流の輪が着実に広まり、深まっているのだと実感し、私も気持ちを新たにセンター運営に微力を尽くしたいと思います。

なお、前号の小山氏からのお知らせのとおり、当センターはセンター長も交代となりました。私自身も6年前に大変お世話になりました田中靖郎先生に代わり、7月からは元国立天文台長、前総合研究大学院大学長の小平桂一先生が精力的にセンターの指揮を取っておられます。新たな体制となりましたボン研究連絡センターの活動に、ご支援・ご鞭撻を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

(宮元)

1. ドイツ連邦レベル等での学術動向

1-1 ドイツ学術評議会とドイツ研究協会はエクセレンス・イニシアティブを 2011年以降も継続する意向

dpa Nr.29/1 pp.7-9 2008年7月4日参照

DFG プレスリリース 2008年7月11日参照

http://www.dfg.de/aktuelles_presse/pressemitteilungen/2008/presse_2008_38.html

ドイツ学術評議会（WR）とドイツ研究協会（DFG）がエクセレンス・イニシアティブ事業を2011年以降も継続支援する意向を表明した。両組織は7月11日ベルリンで発表した白書「考えを促進するための刺激」で、第二次選考では採択基準と資金分配はもっとフレキシブルになるべきだと述べている。19億ユーロもの予算が投じられた連邦・各州によるプログラムの第一次選考では特に9校のエリート大学が選抜された。

両組織は、第二回選抜のために援助額を20から30パーセント引き上げるよう提案している。第一回選抜では連邦が援助額の75パーセントを負担した。残りの25パーセントはそれぞれの大学の所在州が受け持つ。大学院設立構想（グラデュエート・コレクト）、先端研究拠点設立構想（エクセレンス・クラスター）、大学の未来構想（エリート大学）の三本柱からなる当イニシアティブの構造には変更はないという。「この三本柱のよさは実証されている。だからわれわれはこのやり方を保持してゆきたい」とドイツ学術評議会の委員長、ペーター・シュトロシュナイダー氏は述べている。未来構想においては将来的に教育の質も重要な役割を持つかもしれないという。

競争はドイツの大学研究に大きな上昇気流を起こしたとドイツ研究協会会長、マティアス・クライナー氏は語った。さらに同氏は、ドイツの大学の一部は追加援助により 10 年か 15 年の間に国際的なトップグループにのし上がることができるかもしれない。第二回戦では追加援助金が分配されるが、この公募において新申請する大学にも再申請する大学にも同等のチャンスが与えられるべきだと述べた。

大学の未来構想部門で選抜されたエリート大学はベルリン自由大学、アーヘン工科大学、フライブルク大学、ゲッティンゲン大学、ハイデルベルク大学、コンスタンツ大学、カールスルーエ工科大学、ミュンヘン大学、ミュンヘン工科大学の 9 校である。それ以外にも 39 のグラデュエート・コレーク、37 のエクセレンス・クラスターが当該プログラムによって 2011 年まで援助を受ける。

援助金の決定から 1 年半たった今、基本方針の作成者らは期待以上の成果が出ていると考えている。特に援助を受けている大学内で先端研究のための環境が改善され、大学は戦略的に行動するようになったこと、各大学のプロフィールが先鋭化されたことなど、必要不可欠な構造改革に着手していると述べている。

競争による援助金の分配は学術評議会とドイツ研究協会の考えによれば今後も学術的基準により行われるという。第一次選考後、旧東ドイツのどの大学も未来構想部門でエリート大学として選抜されなかったため、それに対して批判が出ていたが、東ドイツ対象の奨励プログラムは考えられないとシュトロシュナイダー氏は述べている。

連邦と各州の研究担当大臣は 7 月 16 日ベルリンで競争を継続すべきかどうかについても初めて協議し、シャヴァーン連邦教育研究大臣はそれに賛成の意を表明した。しかし、いくつかの州からはイニシアティブのための追加資金が他の大学の資金援助を不十分にすると、州の負担分に対して苦情が出ている。10 月末にドレスデンで開かれる教育サミットでメルケル首相と州政府首脳は基本事項について決定する。

ドイツ大学長会議 (HKR) は大筋については満足していると表明した。大学長会議の考えが大方取り入れられているとヴィンターマンテル会長は説明した。総資金は 50 パーセント増やされるべきで、そうすればかなり多くの新申請が可能になるだろうと。また、地方の先端施設に近隣する小さな大学がもっとその真価を発揮することができるように先端施設の地方分配ももっとフレキシブルになるべきであると述べている。

教育・科学労働組合 (GEW) は連邦と各州にプログラムの継続に対して早急な承諾はしないよ

う警告した。教育・科学労働組合理事、アンドレアス・ケラー氏は、先端研究のための何十億ユーロもの追加予算は大学の横幅を広げるのに使われるべきで、今後 5 年間でさらに 70 万人増えるとされる学生のために、どのようにして大学で勉強できる環境を与えるのか、という問いに対して連邦と州はこれまで全く回答をだしていないと述べている。

(ボンセンター)

1-2 大学教育が研究の対象に ー改善策に期待

dpa Nr. 33/ pp. 5-6 2008 年 8 月 11 日参照

BMBF プレスリリース 2008 年 8 月 7 日参照

<http://www.bmbf.de/press/2346.php>

連邦教育研究省 (BMBF) は大学教育そのものを研究対象とし、早急に取り組まなければならない大学教育の改善に貢献する予定である。助成の重点テーマである「大学に関する研究」について、約 30 の研究団体が合わせて約 60 の個別テーマに取り組み、より良い大学教育を研究調査することになっている。プロジェクトは 3, 4 年の間に終了される予定であるが、連邦教育研究省は少なくとも総額 1600 万ユーロの予算を出すと、シャヴァーン連邦教育研究大臣の官邸が伝えた。

当プロジェクトを推進しているヘルムホルツ協会傘下ドイツ航空宇宙センター (DLR) の発表によると、最初のプロジェクトはすでに九月に始まる予定である。研究テーマは 7 分野に分類されており、それらは複数の大学による連携、もしくは個々の大学からなる研究団体により取り扱われる。なお、7 つの分野は以下の通りである。

- ・ 職業指導、実務関連、勉強の成果 (8 団体)
- ・ 特殊な専門能力の開発 (4 団体)
- ・ 学校、大学での勉強、職業の接点 (2 個の単独プロジェクト)
- ・ 大学での勉強の企画運営 (4 団体)
- ・ 大学教員の専門化 (6 団体)
- ・ 大学教育の構造 (2 団体)
- ・ 大学教育カリキュラムの、および大学規定に基づいた教育の企画運営 (7 団体)

シャヴァーン大臣は、上記の重点助成テーマの研究から得られた知見を教育改善に関連した大学政策論議に持ち込みたい意向である。この分野については、これまで学問的に実証された知見がほとんどなかったと連邦教育研究省は述べている。全 170 の研究団体からプロジェクトが提案されており、その中から 30 のプロジェクトが選ばれる。問題提起も重要だが、それ以上に得られた知見をどのように大学教育の実践に生かすかが特に重要とされる。

ドイツ学術評議会 (WR) は先日大学教育に対して助言を行ったが、その際このテーマについてこれまで以上に研究をするよう勧告した。

ドイツの大学教育の質が不十分であることと、学生に対する面倒見の悪さは長い間批判されてきたが、それに加えて教育環境における構造的変化も問題となっている。とくにボローニャ・プロセスの結果、段階分けされたバチュラー・マスター制度が導入されているところだが、それにより大学の授業は以前にも増して高校並みの教育へと変遷しつつある。

(ボンセンター)

1-3 大学等研究機関における数学ランキング発表

AvH プレスリリース 2008 年 8 月 27 日参照

<http://www.humboldt-foundation.de/web/733975.html>

アレクサンダーフォンフンボルト財団 (AvH) は同財団から賞や奨学金を得てドイツの大学や研究機関で研究に携わっている数学者の数と所属先を調べた結果をランキングにして発表した。

今回の調査は、純粋数学と応用数学の 2 つの分野に分けて行われた。純粋数学分野では 1998 年から 2007 年までに、フンボルト賞あるいは奨学金を授与された数学者 317 人が 64 の大学や研究機関で研究に携わっており、そのうち、最も人気があったのはビーレフェルト大学で、31 人が研究滞在先として選んでいる。第 2 位はボン大学で 16 人、第 3 位はベルリン・フンボルト大学とベルリン工科大学で、ともに 14 人であった。

応用数学では 1998 年から 2007 年までに、186 人の数学者が 60 の大学や研究機関に滞在し、第 1 位は 15 人が選んだベルリン・フンボルト大学、次いでミュンヘン工科大学、ボン大学、シュトゥットガルト大学がともに 11 人で第 2 位、そしてビーレフェルト大学とベルリンのヴァイアーシュトラス応用推計学研究所がともに 7 人で第 3 位にランクされた。

なお、総合評価では、両分野合わせて 38 人の数学者から研究滞在先に選ばれたビーレフェルト大学が 1 位、ベルリン・フンボルト大学 (29 人) とボン大学 (27 人) がそれぞれ 2 位、3 位であった。

(ボンセンター)

1-4 大学卒業生過去最高を記録

dpa Nr. 36/ pp. 22 2008 年 9 月 1 日参照

昨年ドイツでは大学卒業者の数が過去最高を記録した。2006 年から 2007 年にかけて卒業者数は前回調査より 8 パーセント上昇し、28 万 6400 人に達した。新しい履修課程である学士および修士のシステムはますます重要となっており、連邦統計局の発表によると、2007 年にすでに大学卒業者の 13 パーセントは学士または修士の資格を取得している。2007 年度の卒業試験では 2006 年に続き 2 年連続で女性の卒業者数が男性の大学卒業者数を上回った。

卒業試験に合格した 28 万 6400 人のうち、11 万 2600 人はディプロム課程修了者、(6 パーセント増)、8 万 3500 人は単科大学卒業生 (2 パーセント増)、2 万 8900 人は教職課程を卒業した (10 パーセント増) ものである。全卒業者の 79 パーセントは従来の形式の卒業試験を受けたことになる (5 パーセント増)。全卒業者のうち、8 パーセントは博士号取得者だった (2 万 3800 人)。

前年度は 10 パーセント足らずであった新履修課程の卒業生は 13 パーセントに達し、うち 2 万 3400 人が学士号、1 万 4200 人が修士号を取得した。

(ボンセンター)

1-5 79 大学の女性教授計画構想を採択

dpa Nr. 29/ pp. 29-30 2008 年 7 月 14 日参照

BMBF プレスリリース 2008 年 9 月 3 日参照

<http://www.bmbf.de/press/2358.php>

ドイツの大学で教育研究に携わる女性の数は増加し続けているが、女性の教授は引き続きかなりの少数派である。7 月 7 日連邦統計局が発表したところによると、女性教授の割合は 1997 年から 2007 年の 10 年間で 9 パーセントから 16 パーセントに増加した。講座を担当する女性教授の数は昨年末ちょうど 6100 人となり、過去最高水準を更新した。

女性教授の割合が高いのは人文社会科学、芸術学の分野で、2007 年には講座担当教授の 4 人に 1 人以上が女性で、全体の 28 パーセントを占めた。それとは反対に女性教授数が顕著に低いのが工学、数学、自然科学の分野で、工学が 8 パーセント、数学と自然科学がそれぞれ 11 パーセントだった。

連邦統計局の暫定的な統計計算によればドイツの大学で教える男性、女性教授の総数は 2007 年末 37,700 人であった。この総数は 10 年来ほぼ一定だという。

女性教授数を増加させるために連邦と各州は連邦教育研究省のイニシアティブにより新たに「女性教授プログラム (Professorinnenprogramms)」を開始し、ドイツの大学が優秀な女性研究者の

ための長期展望を立案・支援する計画に対し、5年総額1億5000万ユーロを投入する。本年6月に締め切られた第1回募集には、国内大学総数の1/3にあたる113大学から女性教授構想が申請された。9月初旬に採択結果が公表され、全提案のうち15州79大学の提案が採択となり、それにより、140名までの優秀な女性先端研究者に助成金が支給される。

(ボンセンター)

2. ボン研究連絡センターの活動

2-1 JSPS Abend 開催

2008 年 8 月 21 日 (木)、当センターはボン市郊外の Bad-Godesberg に位置するかつての選帝侯の舞踏館<La Redoute>において、JSPS Abend 《学振の夕べ》を開催した。JSPS Abend は、毎年夏に近隣の対応機関、大学等諸団体の長をはじめとする関係者を招待し、当センターの活動報告を行うとともに、我々の活動への協力に感謝をし、更なる交流・協力の輪を拓くための会である。

今年度はセンター長の交代、また、開催直前に小野理事長へドイツ連邦共和国から『ドイツ連邦共和国功労勲章大功労十字章』が授与されたことも重なり、対応機関の幹部を中心に多数のVIPが駆けつけてくださり、過去最高の出席者数となった。

初めに小野理事長から本会活動への協力に対する関係機関への謝辞、及び田中前センター長の日独学術交流発展への多大な貢献に対する感謝の意、そして小平新センター長への今後の期待が述べられた。続いて、在独日本大使館の小井沼次席公使、フンボルト財団のシュヴァルツ会長、DAAD のホルムート会長、ノルトライン・ヴェストファーレン州イノベーション学術研究技術省のシュトゥックラット事務次官から小野理事長の叙勲への祝辞、及び田中前センター長の功績への賞賛の辞、そして小平新センター長への今後の活動への支援を表明いただいた。また、飛び入りでドイツ大学長会議のヴィンターマンテル会長からも謝辞をいただいた後、DFG のツヴォネク事務局長の乾杯の挨拶でレセプションの開始となった。



田中前所長ご夫妻



小野理事長



小平新所長

会も終盤に差し掛かった頃、田中前センター長から13年間の活動の歩みと思い出、そして関係者に対する深い謝辞が述べられると、出席者からは盛大な拍手が送られ、その功績が讃えられた。

その後、ドイツ JSPS 同窓会メンクハウス会長からも謝辞をいただき、最後に小平センター長による着任の挨拶と今後の活動に向けた展望が述べられ、センターの新たな出発を祝う貴重な機会となった。

(宮元)

2-2 来訪&訪問、会議出席等

【7月】

- 07 月 01 日 (火) 小平新所長がボン研究連絡センターに着任
- 07 月 02 日 (水) 小平所長が、ベルリン日独センター佐藤副事務総長訪問、在独日本大使館訪問、DFG 年次総会出席 (於ベルリン)
- 07 月 03 日 (木) 小平所長が、フンボルト財団 Schwalz 会長、Schutte 事務局長表敬訪問 (於ボン)
- 07 月 04 日 (金) 宮元新副所長がボン研究連絡センターに着任
- 07 月 07 日 (月) 小平所長が DFG von Kalm 第一局長、Kruessmann 国際課長訪問 (於ボン)
- 07 月 07 日 (月) 小平所長、田中前所長、Ganter 職員及び Schulze 職員が DFG von Kalm 第一局長、Kruessmann 国際課長等との昼食会出席 (於ボン)
- 07 月 08 日 (火) 文部科学省 加藤国際交流官来訪
- 07 月 09 日 (水) 小平所長一時帰国 (～8 月 7 日)
- 07 月 10 日 (木) 田中前所長、宮元副所長、Ganter 職員が名古屋大学とボーフム大学インターナショナルトレーニングプログラム (ITP) に基づく交流協定調印出席 (於ボーフム)

【8月】

- 08 月 06 日 (水) 宮元副所長、野尻国際協力員がボン大学サマースクール開講式に出席 (於ボン)
- 08 月 07 日 (木) 宮元副所長、野尻国際協力員、Schulze 職員が AvH 主催フェオドア・リュエネン・フェロー派遣前オリエンテーション及び帰国者報告会出席 (～8 月 8 日) (於ボン)
- 08 月 13 日 (水) 小平所長、宮元副所長が DAAD Hormuth 会長表敬訪問 (於ボン)
- 08 月 18 日 (月) 小平所長、宮元副所長がデュッセルドルフ総領事館 丸尾総領事、大熊副領事表敬訪問 (於デュッセルドルフ)
- 08 月 19 日 (火) 宮元副所長が早稲田大学ヨーロッパセンター Springmann 事務長訪問 (於ボン)
- 08 月 21 日 (木) JSPS Abend(学振の夕べ)開催 (於ボン)
- 08 月 22 日 (金) 小平所長、宮元副所長が同窓会幹部と打合せ (於ボン)
- 08 月 23 日 (土) 小平所長一時帰国 (～9 月 4 日)

- 08 月 28 日 (木) 筑波大学 橋田国際部長、新井教授、大友助教が欧州拠点設置調査のため来訪
- 08 月 28 日 (木) 宮元副所長がボン市主催筑波大学調査団歓迎レセプション出席 (於ボン)
- 【9 月】**
- 09 月 03 日 (水) 中部大学 堀川直顕教授来訪
- 09 月 08 日 (月) 小平所長、宮元副所長が デュッセルドルフ大学 Martin 教授と打合せ (於デュッセルドルフ)
- 09 月 09 日 (火) 連邦教育研究省国際局 Dr.Heinrichs 部長、Dr.Stähle 副長来訪
- 09 月 10 日 (水) 小平所長、宮元副所長が在独日本大使館 高野大使離任式出席 (於ベルリン)
- 09 月 12 日 (金) 早稲田大学 大野国際部長、足立国際課長、室井ヨーロッパセンター所長代行、Springmann ヨーロッパセンター事務長が来訪
- 09 月 12 日 (金) 小平所長、宮元副所長、Ganter 職員が同窓会幹部と打合せ (於ボン)
- 09 月 13 日 (土) 小平所長一時帰国 (～10 月 4 日)
- 09 月 18 日 (木) 野尻国際協力員が NRW 州イノベーション・科学技術省国際課 Munsel 副課長を訪問し研修課題調査 (於デュッセルドルフ)
- 09 月 22 日 (月) DFG Dr.Legeland 氏来訪 (於ボン)
- 09 月 25 日 (木) 宮元副所長が第 16 回独日原生虫病シンポジウムにて JSPS 事業紹介 (於ゲッティンゲン)
- 09 月 30 日 (火) 宮元副所長、Ganter 職員、Schulze 職員が DFG、在ボン韓国総領事館および台湾行政院科学委員会ボン事務所との昼食会出席 (於ボン)

2-3 その他の活動

- ・ ドイツ語版ニューズレター (ルンド・シュライベン) 等の作成・配布
- ・ 各種照会、情報収集・調査、情報提供業務
- ・ 訪問者に対する便宜供与、訪問アレンジ
- ・ JSPS 事業説明会 (2008 年 10 月開催) 準備
- ・ 第 5 回日独コロキウム (2009 年 3 月開催) 準備
- ・ 第 14 回日独シンポジウム (2009 年 5 月開催) 準備

3. 今後の予定

2008 年

- 10 月 10 日 (金) 野尻国際協力員がドイツ大学長会議主催シンポジウム出席 (～11 日) (於ベルリン)

- 10 月 17 日 (金) JSPS 事業説明会開催及び JSPS ドイツ同窓会による「会員による会員の招待」イベント参加 (～18 日) (於ボーフム)
- 10 月 24 日 (金) 小平所長がミュンスター大学 IRTG シンポジウムに出席 (～25 日) (於ミュンスター)
- 10 月 31 日 (金) 小平所長、宮元副所長が JGFoS 出席 (～2 日) (於マインツ)
- 11 月 02 日 (日) 本部職員多田氏、濱田氏が DFG 主催 InfoWeek 参加のため来独 (～7 日) (於ボン)
- 11 月 03 日 (月) 筑波大学 日高健一郎教授来訪
- 11 月 11 日 (火) 本部職員生稲氏、西浦氏によるセンター会計実地調査 (～12 日)
- 11 月 18 日 (火) 小平所長が AvH 主催フェオドア・リューネン・フェロー派遣前オリエンテーション及び帰国者報告会出席 (～19 日) (於ミュンスター)
- 11 月 20 日 (木) 宮元副所長、野尻国際協力員、Albers 職員が海外留学プログラム展覧会 (Grenzenlos) にて JSPS 事業紹介 (於ボーフム)
- 11 月 21 日 (金) 小平所長、宮元副所長がケルン日本文化会館主催シンポジウム出席 (於ケルン)
- 12 月 13 日 (土) 小平所長が研究調査のため一時帰国 (～1 月 4 日)

2009 年

- 03 月 09-10 日 第 5 回日独コロキウム開催 (於バートホネフ)
- 05 月 22-23 日 第 14 回日独シンポジウム開催 (於カールスルーエ)

4. その他お知らせ

4-1 早稲田大学生インターンシップ終了報告

ぼんぼん時計第 19 号にて、早稲田大学から協定校であるボン大学へ留学中の学生を当センターにてインターンシップとして受入れ予定との報告がされたが、この度、本年 4 月から 7 月に渡り業務実習を行った秋谷郁恵さんから、実習の感想をいただいたので、本人同意のもと掲載します。

秋谷さんには 4 ヶ月にわたり週 2 回各半日のペースで業務実習を行っていただきました。直接業務の指示を行った現地職員によれば、ドイツ語によるコミュニケーション能力にも不足はなく、電話応対も適切にこなし、積極的に業務をサポートしてくれたとのこと。より良い事務処理方法を常に意識して取り組んでいたとのこと、受入側としても普段見過ごしがちな問題点や改善点を発見する良い機会になると思われます。

センターとしても、優秀な学生に就職先の候補として JSPS を紹介できる利点もありますので、今後も早稲田大学側からの要請があれば、業務に差し支えない範囲で受入りたいと考えています。このインターンシップ経験者から、未来の日独学術交流を支える人材が輩出できる日が来るかもしれません。

(宮元)

～研修の感想～

ドイツに1年滞在することになり、このまたとないような機会に何か日本とドイツの間に立つような経験をしたいと思っていました。貴センターでインターンシップ生として受け入れていただき、ドイツと日本を行き来している研究者の多さを知ったり、日本への留学生と関わることができたりと、二国間の学術面での交流を直に見、考える機会をもつことができました。また、文化的交流という面以外でも各種イベントおよびその準備の進め方など、これから社会に出て行く上で必ず生きることも多く学びました。アルバイトなどを含めても事務作業は初めてでしたので至らない点も多く、職員の方々に助けていただければかりでしたが、留学先でしかできない貴重な体験をさせていただきました。

(早稲田大学3年 秋谷 郁恵)

4-2 現地職員の交代について

9月末を持って現地スタッフの Sabine Ganter-Richter 氏が当センターでの勤務を終了されました。Ganter 氏は13年と半年という長きにわたり当センターの活動を支えてくださり、その間、秘書的業務はもちろんのこと、シンポジウムのコーディネートや各種事業の広報活動等幅広い業務を担っていただきました。特に、現在本会が積極的に支援している学振事業経験者同窓会設立及びその活動支援において、ドイツ同窓会がその先駆けとして他国の模範的体制を構築していることは、設立当初から携わった彼女の貢献が大きいと、関係者ならば納得していただけたと思います。

センターとして Ganter 氏を失ったことは大きな痛手となりましたが、幸いにも彼女の新たな職場は本会の対応機関であるドイツ研究協会 (DFG) であり、しかも国際事業部の日本担当です。DFG は来年東京事務所を開設予定であり、本会との関係がますます深まることが期待されます。なお、Ganter 氏の功績に対し、本会から感謝の意を示したレターが本人に送られました。

また、Ganter 氏の後任として10月からボンセンターの新たなスタッフとなる Meike Albers 氏からも、勤務開始にあたりメッセージをいただきました。英語・日本語に堪能で、日系企業での勤務経験もあり即戦力としての活躍を期待しています。

(宮元)

～Ganter 氏からのメッセージ～

Two years after the official opening of the JSPS Bonn Office I joined the German JSPS Team as a student-worker in 1994 after graduation from Bonn University. During the following years the office's activities developed steadily: we established a regular newsletter in German, called "JSPS Rundschreiben", first alumni activities started in 1995 with the establishment of the German JSPS-Club and annual meetings in the framework of scientific symposia, and in 2004 a series of German-Japanese Colloquia was initiated. All over the years the office arranged many delegations coming from Japan and supported the further development of JSPS programs jointly managed with its German partner organisations. This is only a very brief sum-up.

After 14 years I left the JSPS Bonn Office end of September 2008 to take over new position at Deutsche Forschungsgemeinschaft (DFG), which is JSPS's partner organisation and very similar to JSPS in function and activities. My new office at DFG is just across the street, looking out of my window I can see my former colleagues at JSPS Bonn Office!

I'm very grateful to JSPS for offering me the opportunity to support scientific exchange between our two countries. This would not have been possible without the always hearty and friendly help of all colleagues coming from Japan - and in 14 years it was quite a few colleagues :-). Moreover I'm very happy to feel, we became friends. Also having had the chance to meet so many Japanese scientists will be very helpful for my new job. At DFG I now belong to the team in charge of scientific cooperation with Japan. Very naturally this means close cooperation with JSPS!

My heartfelt thanks to all of you! I always enjoyed working with you and would be really glad, to continue close cooperation with you, where ever you are in Japan and Germany.

(Sabine Ganter-Richter)



～Albers 氏からのメッセージ～

My name is Meike Albers. After finishing high school I studied Japanese studies at Bonn University. To improve my Japanese I did an academic exchange year at Kumamoto University and returned to Kumamoto later to do an internship at Kumamoto International Foundation. After graduating from university I started to work for a Japanese company and later for a Japanese bank in Düsseldorf. On the 1st of October I started to work for JSPS Bonn Office. I like my new work really much and will try to do my best to promote the scientific exchange between Japan and Germany.

(Meike Albers)

センター長雑感

ボンボン時計の日本との時差が夏は7時間。着任はしたものの当面は日本での仕事と掛け持ち。海外研究連絡センターの業務は多岐にわたり、勉強しなくてはならないことばかり。副センター長始め国際協力員、現地職員、それに本部職員の高い能力に助けられて、やっと夏を乗り切る。経済、科学技術、学術の面で、お互いに最適・相応のパートナーと認める日本とドイツ。第一印象は、社会や高等教育の抱えて居る課題が似ていること。課題対応の方向性も共通している部分が多い。次に感じるのが「でも、少し違う」。「困難な時代だから教育が大切」と2015年までにGDP比での公財政支出10%達成を目標に掲げる政府。「成果も大切だが人は国の礎」と研究者の生活支援を充実。「学術交流は文化外交政策の重要な柱」と外務省も本腰を入れる。現場・個人の努力に待ちがちな日本と、組織・枠組みを完備しようとするドイツ。時計のテンポが少し違うのでは……。日本への熱い視線を感じながら工作中です。

(小平桂一)

ぼんぼん時計第21号
日本学術振興会ボン研究連絡センター
JSPS Bonn Office
Ahrstrasse 58, D-53175 Bonn (事務所住所)
Postfach 20 14 48, D-53144 Bonn (郵便物用)
Phone +49 (0) 228-375050 Fax +49 (0) 228-957777
www.jsps-bonn.de